

建築としてのノコギリヤネ

～ 私（ム）が開いて（ハ）、公となる ～

●建築：Architecture の訳語。建物を造る行為（過程、技術）。個々の建物を示す場合は「建築物」。モダニズム建築は、1920年代に機能主義、合理主義の建築として成立した。語源は、古代ギリシャ語の arkhitekton（アルキテクトーン）。「主な」「第1」などの意味の Arkhos（アルコース）と「職人」、「大工」などの意味の tekton（テクトーン）からなる。
(wikipedia)

●建築的個人史

生家（1957）、日本万国博覧会（1970）、建築学科入学（1977）。その後、専攻は建築から都市計画へ（私から公へ）

1. 「ノコギリヤネとモダニズム建築」（「墨会館」から見えてきたこと） （『断章・ノコギリヤネのある風景 その13』から）



●ガチャ万とモダニズム建築

高度経済成長を舞台にして、中核的な地方の一企業が世界に名を馳せる建築家の設計に託した企業展望の顛末といったところか。いわば「ガチャ万とモダニズム建築」と題する喜劇かな。まずは、時間と風景を俯瞰して見せてやろう。

●「ツヤキン・ロード」と「タンゲ・ロード」

丹下の建築で構成される約300メートルにおよぶ「ツヤキン・ロード」が誕生した。一方でタンゲは、1970年に開催された大阪万博のお祭り広場で名声を得て、中東諸国の首都建設等、活躍の場を海外へと展開していった。東京都庁舎が竣工した1990年、艶金は創業100周年を迎えた。絶頂期であった。ガチャ万地方都市の一隅で「タンゲ・ロード」と「ツヤキン・ロード」が交錯していた。

●要塞が守ったもの

外壁が守ったのは、建築ではなく、中庭というカタチの「からっぽ」だったのさ。そこは、創業者の「地霊」が眠る聖域だった。ガチャ万とその後の景気変動を生き抜いたのは、「中庭という日常」なのかもしれない。

●名もなきモダニズム建築

モダニズム建築が合理性、機能性を造形理念とするならば、ノコギリヤネだってモダニズム建築じゃないか。イギリスで生まれ、この国で木造の伝統構法と融合して、そして地方の名もなき大工たちが独自の合理性、機能性を工夫したコウバだ。

2. 「のこぎり二」という「建築」

●E-hon1：ノコギリヤネをのぞいてみたら

窓から見えたノコギリヤネをのぞいてみた。闇の中に一枚の絵が見えて来た。それは、外の風景を逆さまにしたものだった。ノコギリヤネの壁に昼間の空と雲が映り込んだ絵だった。

少し時間が経つと、眼が慣れてきた。

中は“からっぽ”だった。おや、この匂いは…。そうだ、祖父母のコウバだ。ガッチャン、ガッチャン、ガッチャン。聞き慣れた音だ。その音は、暑い夏の日も、寒い冬の日も止むことはなかった。

昔の記憶をたどるように、視線が宙をさまよう。一瞬、森の中で、空を仰ぎ見ている気がした。ノコギリヤネを構成する木組みは、大地から伸びた木々がお互いを支え合っているかのようだ。ハッとして足元を確かめた。そこには、漆喰で固められた土間があった。

北窓が導くパースペクティブは、過去に通じるタイムトンネルかもしれない。視線の突き当たりに見えるものは何だろう。あの絵だろうか。

窓からノコギリヤネが見えている。あの中に入ったはずなのに。少し時間が経つと、眼が慣れてきた。

今度は逆さまの世界に来てしまったようだ。日射しが下から登っている。夏は寒く、冬は暑い。でも、あの音だけは同じだ。ガッチャン、ガッチャン…

大空に伸びていた木々の枝は、根となって地下でつながっていくようだ。

今度はどこにつながっているのだろうか。そこは、地上なのか、内なのか、外なのか。

大地に影を落とすノコギリヤネ。それは、内なのか、外なのか？

大空に描かれたノコギリヤネのシルエット。あの絵と同じだ。どちらがノコギリヤネなのだ。

水面に映るノコギリヤネ。右と左、上と下が入れ替わる。

ノコギリヤネの世界は、内と外、上と下、右と左が交錯する。上下を戻して、元の世界に戻ることしよう。

●E-hon2：ノコギリヤネの分かれ道

一つのノコギリヤネが閉じられました。

大きな役割を終え、そのノコギリヤネは解体されました。

その跡に、「からっぽ」の大地が生まれました。

その「からっぽ」は家で埋まり、新たな役割を担い始めました。

一つのノコギリヤネが眠っています。

それまでの働きに感謝して、掃除をしました。

そして、「からっぽ」の空間が生まれました。

その「からっぽ」は多くの人たちが集い、新たな役割を担い始めました。

そのノコギリヤネは、創造空間となりました。

そのノコギリヤネは、展示空間となりました。

そのノコギリヤネは、交流空間となりました。

そのノコギリヤネは、「生きられる空間」となりました。

3. ノコギリヤネを「ひらく」ということ

(『断章・ノコギリヤネのある風景』)



- その1 : “ノコギリヤネのある風景”の発見
 - ・2006年6月17日：ワタシの“ノコギリヤネのある風景”の発見
 - ・2012年2月4日：「産業遺産」としての“ノコギリヤネのある風景”
 - ・2016年11月3日：“ノコギリヤネのある風景”のメタモルフォーゼ
 - ・2018年12月15日：なかなか遺産認証式／消えてゆく“ノコギリヤネのある風景”

- その2 : 『宇宙の法則』1990を超えて
 - ・『宇宙の法則』との出会い
 - ・1990年という時代
 - ・ポスト『宇宙の法則』の時代：地域社会（共同体）の壊れていく風景
 - ・未来の予感：“ウツホ（空洞）”の生成する風景

- その3 : ノコ（ノコギリヤネ）が“たつ”風景
 - ・“ノコギリヤネのまち”の100年
 - ・ノコが立つ
 - ・ノコが建つ
 - ・ノコが起つ

- その4 : 「起・機業コミュニティ」の寓話
 - ・カラスとトンビ
 - ・ノコギリヤネの夢見る少女
 - ・ガチャ万の行方
 - ・「起・機業コミュニティ」の寓話
 - ・「起・機業コミュニティ」を超えて
 - ・残ってしまったノコギリヤネという現実
 - ・ノコギリヤネ with オープンスペース
 - ・起の大地から始まる「オワリ」の未来

- その5 : オワリの大きな“からっぽ”・一宮
 - ・“からっぽ”になった一宮
 - ・“からっぽ”から生まれた「ガチャ万」
 - ・からっぽ、ウツホ、ゼロ・・・それは始まりのチカラ
 - ・「一宮という虚構」あるいは「オワリのからっぽ物語」

- その6 : “コウバ”としてのノコギリヤネ
 - ・2,000棟のノコギリヤネ
 - ・ノコギリヤネの生まれた大地
 - ・生活の営みを反映するノコギリヤネ
 - ・工場（コウバ）が開いて、公場（コウバ）に変わる

●その7：木曾川という“ギフト”

- ・ノコギリヤネと木曾川
- ・“木曾八龍”という“気”の流れ
- ・木曾川となった“木曾八龍”
- ・公園とコウバ（公場）

●その8：「ノコギリヤネ 100 年マップ」と「燃えつきた地図」

- ・「ノコギリヤネ 100 年マップ」から失踪した時代
 - ・オワリ、イチノミヤという共同体と神話
 - ・1970 年の燃えつきた地図：ノコギリヤネの失踪
 - ・地と図の反転で見えてくる未来
- そして、はじめに戻る。しかし、それは同じところではない。

●その9：オニはソト？

- ・「鬼ヶ島」から青木川を遡る。ここは、一宮ではない？
- ・かつて、ここには“ニワ”というクニがあった
- ・ノコギリヤネのオニの正体
- ・「ニワ」という「公場（コウバ）」
丹陽から千秋へ向かう

●その10：尾州木東奇譚／「エキノコ玉ノ井」序開

- ・玉ノ井ラビリンス
- ・エキノコが「開く」とき
- ・ノコギリ・スケルトン・トライアル・・・ノコギリヤネが遊んでいる
- ・もう一つの木東奇譚
起から玉ノ井へ、そして籠屋に戻る

●番外編：ネコの眼・ノコの眼

- ・「こわすのは、かんたんだからね」

●その11：「ノコギリヤネ・トライアングル」

- ・ノコギリヤネの原風景／工村あるいは機業コミュニティ
- ・「オワリ」という“生命共同体”の誕生
- ・共同体のギフト
- ・ノコギリヤネに受け継がれる“生命共同体”
辺境あるいは隅の風景へ

●番外編：寓話「ノコギリヤネのつくる星座のまち」

- ・ノコギリヤネの「迷い人」
- ・ノコギリヤネがつくる「星座」
- ・ノコギリヤネの出口

●その12：ミノ／キソガワ／オワリ

- ・ミノ・オワリを分けるキソガワ
- ・「身の終わり」からの始まり
- ・木曾川を挟む「ミノ・オワリ生命共同体」
- ・木曾川から始まる風景のメタモルフォーゼ
のこぎり二に開けられた“円空”

●番外編：「のこぎりニ」で開かれた二つの祝祭

- ・0825 の日常：「のこぎりニ」というコミュニティ
- ・0903 「のこぎりニ」のオニから聞いた話① サウンドインスタレーション：北條知子
- ・0903 「のこぎりニ」のオニから聞いた話② サウンドパフォーマンス：恩田晃
- ・大きな祭のあとの「のこぎりニ」の新たな日常

●その 13：ノコギリヤネとモダニズム建築

- ・ガチャ万とモダニズム建築
- ・「ツヤキン・ロード」と「タンゲ・ロード」
- ・要塞が守ったもの
- ・名もなきモダニズム建築

モダニズム建築は、…開放的な空間構成のアイデアを日本の伝統建築に見出した。ノコギリヤネは、自由な空間、内と外の連続性を持っていたが、多くが閉じてしまった。再び開くために何ができるだろう。

カラスの浅知恵と言われそうだが、オモテとナカをひっくり返してみるというのはどうだ。ウチとソトを。ある学者が言うには、動物の内臓である腸の管をひっくり返したものが植物の茎であり、それは、宇宙に開き、太陽につながるカタチであると。墨会館の中庭でひっくり返してみる。オモテにモダニズム建築の端正な顔が現れるだろう。からっぽのノコギリヤネは中庭と同じだ。ウチとソトをひっくり返してみたらどうなるかな。

さて、私の中のノコギリヤネを開く → 私が開いて公となる（だろうか？）

終わり／尾張（は始まり）



のこぎりニの日常／萃点（南方マンダラ）